

問題 1

1. 研究論文のクリティックについて次の問い合わせに答えなさい。

1) 研究論文のクリティックとは何か、説明しなさい。

【解答記載例】

研究論文をていねいに正確に読んで、その研究の価値（長所短所）を客観的に見極め、批評すること。

【出題の意図】

研究の基本である論文クリティックの基礎知識を問うものである。

【参考文献】

「かんたん看護研究」（南江堂）

2) 研究論文のクリティックをする際に必要とされる能力は何か？（　　）内に入る適切な語を解答欄に記入しなさい。

【解答】 クリティカル・（ シンキング ）

【出題の意図】

研究の基本である論文クリティックの際に必要な能力についての基礎知識を問うものである。

【参考文献】

参考文献：「よくわかる看護研究論文のクリティック」（日本看護協会出版会）

2. レビューに関する次の文章の（　　）に入る適切な語をそれぞれ解答欄に記入しなさい。

現状のエビデンスの調査結果を要約し提供するレビューのことを（ A ）レビューといい、エビデンスギャップを特定し、科学的に未解決の領域やテーマを網羅的な情報収集を通じて明らかにするレビューのことを（ B ）レビューという。

【解答】

A	ナラティブ（または）文献
B	スコーピング

【出題の意図】

研究の基本であるレビューの種類についての基礎知識を問うものである。

【参考文献】

「スコーピングレビューが読める・書ける本」（メジカルレビュー社）

3. 上記設問の B のレビューについて、その方法論の透明性を高めるために 2018 年に提唱された報告ガイドラインの名称を答えなさい。

【解答】

PRISMA-ScR

【出題の意図】

スコーピングレビューの基礎知識を問うものである。

【参考文献】

「スコーピングレビューが読める・書ける本」（メジカルビュー社）

4. 次の研究法について説明しなさい。

1) 症例対照研究

【解答記載例】

疾病の原因を過去にさかのぼって探そうとする研究（後ろ向き）。目的とする疾病（健康障害）の患者集団とその疾病に罹患したことのない人の集団を選び、仮説が設定された要因に暴露された者の割合を両群比較する。

【出題の意図】

研究デザインの基礎知識を問うものである。

【参考文献】

「疫学用語の基礎知識」（日本疫学会ホームページ）

2) 実装研究

【解答記載例】

エビデンスに基づく介入（evidence based intervention, EBI）を臨床やコミュニティの場に組み込む際の過程、阻害要因、促進要因を明らかにする研究。

【出題の意図】

近年注目されている研究デザインについて問うものである。

【参考文献】

「保健医療分野の実装研究」（島津、2018：医療の質・安全学会誌、13(4)）

問題 2

1. このような学生 A の学習状況に対して、看護教育者としてどのような支援や指導が適切であるか。理論等を踏まえながら、具体的かつ論理的に述べなさい。

【解答記載例】

学生 A の状況は、強い緊張感や自己否定的な思考が目立ち、自己効力感が低い状態にあると捉えられる。このような状況に対し、看護教育者としては、学生の心理的側面を理解しつつ、段階的かつ個別的な教育的支援を行うことが求められる。

まず、バンデューラの自己効力感理論に基づき、学生が「自分にもできる」と感じられるような小さな成功体験を積ませることが重要である。たとえば、患者への声かけや観察のポイントをあらかじめ明確にし、「今日は何に注目して患者さんと関わってみよう」といった具体的な目標を設定する。実践後には肯定的なフィードバックを行い、学生自身が達成感を感じられるように支援する。

また、成人学習理論 (Andragogy) の視点からは、学生自身が主体的に学びに向かえるような内的動機づけの支援が求められる。学生 A に対しては、失敗を恐れず挑戦することの意義や、学習のプロセスを通じて得られる成長について対話を通して伝えることが望ましい。定期的な振り返りの時間を設け、学生が自己の感情や行動を客観的に見つめる機会を持たせることで、内省を深める支援となる。

さらに、心理的安全性を確保することも欠かせない。学生が「間違ってもよい」「安心して相談できる」と感じられるよう、否定的な評価や比較ではなく、努力や姿勢に着目したフィードバックを心がけるべきである。加えて、学生間での比較に対しては、「個人の成長は一律ではなく、学びのプロセスは人それぞれである」という教育的メッセージを繰り返し伝える必要がある。

総じて、学生 A のような不安の強い学生に対しては、理論的背景を踏まえた個別的・段階的支援と、心理的安全性を高める教育的姿勢が不可欠である。教育者自身が「支援的な存在」であることを明確にしながら、学生の成長を共に見守る姿勢を持つことが、学生の自己効力感の向上と主体的な学びの促進につながる。

【出題の意図】

本設問は、看護学実習における学生の心理的・行動的特徴を的確に捉え、理論に基づいて適切な支援や指導を論理的に構築し、言語化する力を評価することを目的とする。学生理解力、理論の応用力、実践的な指導力、論理的思考力および表現力が問われるとともに、看護教育者としての教育的判断力を総合的に評価する問題である。

問題 3

1. 看護教育におけるアクティブ・ラーニングの特徴として正しいものを 2 つ選びなさい。

【解答】 a, d

【参考文献】

- ・ 藤田あけみ他 (2024) 看護基礎教育におけるアクティブ・ラーニングの実態と課題. 保健科学研究, 14(2): 49-55.
- ・ 北村敦子他 (2024) 看護基礎教育における「協同学習」の概念分析. 日本看護科学学会誌,

【出題の意図】

看護教育の現場で注目されている「アクティブ・ラーニング」の基本的な理解を評価する。特に、学生の主体的学習や協同学習の重要性を押さえているかを確認するための問題である。受動的な講義聴講との違いを認識できるかを測り、教育方法の理解力を問う。

2. 看護教育における ICT 活用の利点として正しいものを 2 つ選びなさい。

【解答】 b, e

【参考文献】

- ・ 日本看護協会 (2024) 2024 年病院看護実態調査. URL: <https://www.nurse.or.jp/nursing/assets/101.pdf>
- ・ 前田修子他 (2024) 訪問看護業務における看護師の ICT 機器活用意向に及ぼす影響—技術受容モデルを用いたパス解析による仮説検証—. 日本看護科学会誌, 44: 374–384.

【出題の意図】

近年の看護教育における ICT 活用の実態と教育的効果を理解しているかを評価。特に遠隔教育の利便性や学習履歴の管理による学習支援強化など、ICT が教育に与えるプラス面を認識できるかを見る。単なる技術面ではなく教育的意義を問う。

問題 4

1. 「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」における「仮名加工情報」とはどのような情報か、説明しなさい。

【解答】

個人情報保護法が規定する方法で、他の情報と照合しない限り特定の個人を識別することができないよう個人情報を加工して得られた個人に関する情報。

【出題の意図】

看護学研究の実施において必要とされる主な倫理指針における用語の知識を問うものである。

【参考文献】

同指針ガイダンス

2. 次の研究例で倫理的に特に注意すべき点について、記載しなさい。(15 点)

研究例：大学に所属する研究者 A は、長期入院する 3~5 歳の子どもを対象に、治療を受けながらも子どもにとって重要な遊びの機会を得るために、子どもが看護師に期待することについて、インタビュー調査を行って明らかにすることにした。研究対象者となる子どもについては、研究協力機関である B 病院の小児病棟に長期入院する子どもを紹介してもらうことにした。

【解答例】

- ① 本研究実施について所属大学の倫理審査を受ける。必要に応じて協力病院の倫理審査も受ける。
- ② 研究対象者の募集の際には、主治医や担当看護師から募集について案内する場合でも、協力するかどうかの返事は、主治医や担当看護師を経由せず、直接、研究者 A に届くようにする。

- ③ 研究参加への同意を得る際には、子どもの理解力に応じたわかりやすい言葉で説明をし、当該研究が実施されることを理解し、賛意を表する「インフォームド・アセント」を取得する。
- ④ 同意した後も撤回できることを説明する。
- ⑤ 対応表を作る際は、
- ⑥ 子どもの治療に支障がないよう配慮する。など

【出題の意図】

研究における倫理的配慮の重要な点について、具体的に述べることができるか確認する問題である。

【参考文献】

参考文献：同指針ガイダンスなど

問題 5

【解答記載例】

- 1. この事例における医療安全上の問題点について分析しなさい。(12 点)

【解答例】

本事例では、A 看護師の判断に影響した個人的要因として、患者の肺塞栓症のリスクを事前に十分予見できておらず、患者の曖昧な訴えやバイタルサインなどに対する臨床判断力や報告の優先順位づけに課題が見られた。一方、組織的要因としては、報告をためらわせる職場環境や、タイムリーな情報共有を支える明確なルールの欠如、リーダーナースが話しかけにくい状況にある勤務体制などが影響していたと考えられる。

- 2. あなたが行った分析内容をふまえ、この事例における再発防止策について具体的に述べなさい。(8 点)

【解答例】

この事例では、個人の要因（判断ミス）だけではなく、システムの不備や職場風土による報告のしづらさなどが重なって、異変の前兆を捉える機会を逸し、急変を招いたことが考えられる。

A 看護師には、臨床推論力とリスク感知能力の向上のための教育的支援が必要である。特に、患者の主観的な訴えと微細なバイタル変化の関連性を評価し、判断保留時には積極的にリーダーナースなどへ報告・相談する姿勢が重要である。報告を先送りにしない行動力と、異常の早期認識を促す教育的支援も必要である。

組織的要因に対する対策としては、業務の多忙さに左右されず報告を行う/報告を受ける体制整備、報告優先度の明文化、情報共有を促進するカンファレンスや記録システムの見直しが求められる。また、職場内の心理的安全性を高めるため、定期的な振り返りやコミュニケーション研修の導入も有効である。

【出題の意図】

医療安全に関する事例の分析・対策の検討を問う問題を通して、①看護専門職者としての医療安全に関する基本理解、②医療安全の視点から事例を分析する力、③現実的かつ具体的な提言を考案する力、④論理的に分析や対策を検討し論述する力、について評価することを目的とする。